
仇討、散る若葉

古時灯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仇討、散る若葉

【Zコード】

Z3920Z

【作者名】

古時灯葉

【あらすじ】

黒船が江戸の町を騒がせた幕末初期、とある東北の小藩。少年が仇を成そうとしていた。全てをなげうつてまで身を捧げる彼に、師範は一つの条件を出す。それは、師範の娘、幼なじみを前に一晩なにもせずに過ごすことだった。

若武者

座禅を組み、瞑想に耽る龍之介の田の前に、少女が横たわっていた。

寝間着の襟をはだけ、ふくらみ始めたその根元を惜しげもなく晒している。

帯はほどけ、すそから生白い太ももが付け根からあらわになる。彼女は蠟燭の灯りに照らされて溶けようとしているかのようだ。城下町でも噂になるほど美しい容姿の氣だてのいい少女。いや、女とはまだ早い。

紅葉という名に劣らない少女。

恩師の一人娘。

そして、仇討ちの暗い炎を燃やす彼より年上の幼なじみ。ちろちろと、蠟燭の炎が猫の額ほどの広さの蔵をほのかに浮かび上がらせる。

二人だけの姿。

微動だにしない少年と、彼を誘うように着をはだけた少女。心を鎮めるために息を整えようとするたびに、紅葉の花のような匂いが鼻に吸い込まれていく。

龍之介の心はそのたびにさざ波がたつていった。
目をつむり、心を空にしようとしたが、碎く。

が、そのたびに脳裏に紅葉の艶姿が浮かび上がってくる。幼いときから一緒にいる馴染みの少女。龍之介の剣道の師である男の一人娘。

仇をなすことを決意して、もう5年が過ぎた。

10の歳に父親を殺された龍之介。

尊敬の眼差しを向けていた父を姑息な手段で打ち破った男をこの手で葬ることにすべてをかけてきた。

田の前の女にかかるような余裕などない。

なのに、雑念を振り払うことができない。

それを、龍之介の師範は見抜いていたようだ。

紅葉を前に、小屋で一晩過ごすこと。

何もなければ、仇討ちを認めてやろう。

仇討ちを為すその前日、師が提案した条件だった。

背景

江戸の末期。清国が西洋の国と戦争し、敗北を喫したことに國中が動搖を隠さない時であった。そして、異国から黒船が江戸の湾に来航し、金髪碧眼の大男たちがやって来たことで、江戸の住民たちの尻に火をつけたような大騒ぎの最中でもあった。

西国が不穏な動きを示す中、龍之介の故郷である東北のある小藩に影響がなかつたとは言えないわけがない。しかし、山を一つ、二つ越えなければ栄えている町にもいけないような隔離された立地では、変化に敏感になれるはずもない。

龍之介はその藩の剣術指南役の跡取り息子として生を受けた。成長し、やがて父の跡を継ぎ、子を成し、後をまかせ、故郷の士に眠る。

彼はただ、つけられた道筋の通りの人生を歩むはずだった。だが。

現実は大きくそれてしまつた。

龍之介の父は死に、彼は父の友人であつたもう一人の指南役の男の世話をなつてている。

父を死に追いやつた張本人は、のうのうと父の役職であつた剣術指南役に就いていた。

兵部吉面堂吉介

人を食つたような名を持つ、この男こそ、龍之介の仇。そして、この男を殺すためだけにこの身を鬼にささげたのだ。

嘔吐することさえ辞さない激しい研鑽を積み、元服を迎える当日、仇討ちを申し込む。

そのはずであつたのに。

前夜に幼馴染の女と、畳三畳もない小屋で距離を置かないままに

対している。

揺れるはずのない決意。

お互いを挟んでいる蠅燭の炎がひろひろと揺りめこむ。

条件

「紅葉を前に、一晩何もしなかつたら、仇討ちを行つてもいい」
かつて、父の親友だった男はそう言った。

師範の家の居候として住まわせてもらつてゐる龍之介は離れて師範と向き合つていた。

父の背中に隠れるように、紅葉は正座している。

だが、武家の娘らしく、背筋を伸ばし、ただ眼前を見据えていた。
「・・・それで、仇を討つ機会を与えてくださるなら」

幼馴染の紅葉となんて、二人きりになつたことはいくらでもある。
すべての感情を押し殺して、復讐につち進んできた龍之介。
彼にとつて、それは造作もない事であるはずであった。

幼馴染を前にして、何もしない自信は十二分にあつた。

まだ、元服を迎えていない龍之介であつたが、その心は一介の武士だ。

道にそれることは絶対にしない。

そう決めている。

父を尊敬しているの息子として、それは絶対に守らなければならない。

いわば、矜持。

でなければ、復讐のために、修羅道ともとられかねない道は歩まない。

「覚悟はできているみたいだな」

普段は心優しく、穏やかな師範の口が重い。
表情を崩すことの多い師範の顔は張りつめたように強張つてゐる。
龍之介は師範を見据え、首肯した。

「ならば」

紅葉。

父親に名を呼ばれた彼女は立ち上がる。

湯上りしてすぐのはずなのに、外に出るかのよつと整えられ、結いあげられた髪。

龍之介は首をかしげる。

紅葉もまた、その顔が強張っていたのだ。
親子であることがはつきりとわかるほどだ。

まさにその時。

紅葉は音もなく立ち上がった。

凛と、龍之介を見据え。

前触れもなく、帯をほどいた。
はりりと、帯は畳に落ちる。

龍之介は目をすぐにそらそうとした。
が、

彼の名を短く呼んだ師範は鬼のよう、睨みつけるだけ。
蛇を前にした蛙のように、動けなくなる龍之介。

羽衣のように着物を身にまとう紅葉。

袂がはだけ、緩んだ衣装は懐広くなつていた。

恥じらうように胸元を隠す紅葉。

だが、龍之介の目にはつきりと焼き付いていた。

白蝶のような肌。

鎖骨がすうっと浮かび上がり、すっかり上気したうなじ。
隠していた足元は腿の付け根までぐれあがる。

熟れた桃のように柔らそうな素足。

押さえつけられていた胸元は橢円につぶれている。

初めて見た、艶姿。

全てを投げ打つたはずの龍之介がまじまじと見たのは、むろん言
うまでもない。

男なら、釘づけとならないわけがない。

「これでも、か？」

師範はじつと龍之介を見据えたままだつた。

渴いたのどを鳴らした。

初めて、汗が首筋を伝った。

うつむいた瞳は瞬くことすら忘れ、膝の上で拳を作っていた手は震えはじめていた。

仇討ちを誓つたあの日から一瞬たりとも揺るがなかつたはずの決意が、鼓動とともに揺さぶられている。

幼馴染の、城下でも噂となるほどの容姿を持つ彼女の色気だけで。

「龍之介」

と、静寂を呼び起こす低音で龍之介ははつと我に返る。

「できるな？」

鈴虫の鳴き声がこんなに染み渡るなんて。

一人、動搖すら隠すことができなくなつていた龍之介。微動だにせず、ただ仇討ちに燃えているはずの青年を見据える二人。

龍之介は、波打つ血潮を必死に抑え込む。

再び喉を鳴らす。乾ききつた口腔から唾は流れない。いつの間にか噛みしめていた唇が鉄の味となつていた。

夜更

山間から、頭だけを覗かせていた月がいつのまにか夜空を照りしていた。

鈴虫がチロチロと静寂を縫う。

耳を澄ませば澄ますほど、ざわめいてこくよみだ。
小屋を照らす灯りはゆらゆらとふらつてこる。

足を組み、眼を固くつむる龍之介。

開きにされる魚のように身を横たえる紅葉。

二人の影が壁に照らされ、なびいている。

蝶が溶けはじめ、蛹のように膜を作っていた。

目尻にしわが寄っている龍之介。

月は天頂にまで達している。

だが、彼が思っているほど時は経っていなかつた。

紅葉が身体を静かに横たえ、眠るように目を瞑つてから座禅を組み始めた。

ぽつと暖かい色に染まるまぶたの裏に浮かび上るのは、数刻

前に目の当たりにした紅葉の姿。

懸命に落ち着こうとしていることすら苦労するほどだ。

仇を討つために、ただその目的のために生きてきたと言つては過言ではない。

だが、一心不乱に進んできたからこそ、目の前での誘惑に揺ゆぶられている。

女なんて、修行するにあたつて、真っ先に断つてきたからだ。

穏やかになろうとするればするほど、胸の鼓動がはっきりと感じられる。

秋は晩を迎えるといふのに、肌からは熱とともに汗が噴き出していく。

握る手は湿り気を帯びている。

俺は仇を遂げる。

幼馴染の色気に心が動かされそうになるたびに、決意を締めさせる。

何のために父が殺されてから、今までの時間を費やしてきたのか。幼馴染を前にして、何もしなければ、あれほど望んだ仇討ちを師範から許可されるのだ。

たつた一晩の我慢なのだ。

その時だった。

「龍之介」

と、聞き慣れた声。

紅葉の声はまるで、彼方から聞こえてきたようだった。

懸命に落ち着こうとする龍之介。

額にしわを作り、力任せに何も考えていないように振る舞つている。

そんな彼の事を、紅葉は顔を横たえ気づかれないように眺めていた。

龍之介は紅葉の行動に気が付いていなかつた。

仇討ちを前に、幼馴染の少女と一緒に共にする。

何もせずに。

無防備な彼女を前に、平静を保とうとする。

拳を強く握る彼の心境が目を瞑つても手に取るよにわかってしまう。

だつて、年下の幼馴染をずっと見守つてきたのは、他ならぬ紅葉なのだから。

幼少のころからの付き合いだ。

赤ん坊の龍之介を懸命にあやしたのも。

年下の龍之介をからかい、あごで使つたのも。

師範の父親にまとわりつく形で剣道を習いはじめ、親友の息子である幼馴染を完膚なく叩きのめし、泣かぬまいと唇をぐつと噛みしめる彼を何回もくしゃくしゃな顔に仕立てさせたのも紅葉だつた。

そんな、年上に力及ばない子供だった龍之介が今や、父の仇討ちに燃える勇ましい青年となつていて。

もう、泣き虫で頼りない年下の男の子とは言えない。

彼の父が殺されたとき以来、涙を見せることは亡くなつた。

枯れ果てるまで泣いた彼は、その日以来、人が変わつてしまつた。

仇討ちとは言うが、結局、復讐と変わりはない。

龍之介の目的を聞いた紅葉は遠回しに止めるよに勧めた。

だが、龍之介は聞かなかつた。

そのためだけに、彼女の父親が立てた稽古の数倍の量を彼はやり遂げる。

泣き言一つ漏らさないで。

感情ひとつ動かすこともなく、ただ決意したように前を見据える幼馴染。

彼がただ、目的に向かつてまい進する姿に、いつしか心を痛めるようになった。

軽口を簡単には叩けない。同じ屋根の下で暮らしているのに、二人の距離は遠くなる一方だった。

まるで、他人行儀。

頭を押さえつけていたはずの彼をいつの間にか見上げていた。龍之介の年に稽古を止め、今では手慰み程度にしか振ることのなくなつた竹刀をもう一度持とうと考えたこともある。

しかし、今の彼女では龍之介の足手まといにしかならない。

彼が振るう剣の音を後ろで耳にするだけでそれは痛感してしまつ。そう言えば、ずいぶんと顔を見ていいない。

そうっと、眼を開き、音を立てないで横を向く。子供じみていたはずの幼馴染が大人びて見えた。それはそうだ。

紅葉だって、もう少女じゃない。

身体はとうに成長し、色目を使わることも多くなり始めた年頃だ。

だが、紅葉は城下町にいる男に興味を持つことがなかつた。

男に誘われるたび、色目を使われるたびに、脳裏に浮かんだのはかつてうだつが上がらない幼馴染の姿。

いつしか、心に龍之介の事を想うことが増えていったのだ。力及ばず、そのたびに悔しそうに涙をこらえる子供だった彼を。

懸命に稽古を重ねる龍之介の背中は広くなつていった。

時折見せるもの想う眼を見つけて、そのたびに紅葉の心はかき乱されていたのだ。

龍之介の事を想えば想つほど、身体は芯から熱くなつていいく。
しかし、彼女の都合だけで龍之介の本願を奪つてはならなかつた
のだ。

全てを捨ててまで、龍之介は仇討ちにかけているのだから。
彼の行く末をただ、見守ることしか彼女にはできなかつた。
それが、紅葉には歯がゆかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3920z/>

仇討、散る若葉

2011年12月16日22時52分発行